



◎2010年に創立111周年を迎えた伝統校。「至誠一貫」「質実剛健」「和衷協同」を校訓とし、自己実現と社会貢献が出来る人材の育成を目指す。毎年、多くの生徒が難関国公立大に合格。一方で、吹奏楽や陸上、放送、ECC（英語）などのクラブが全国大会に出場。

設立	1899(明治32)年
形態	全日制・定時制／普通科／共学
生徒数	1学年約290人(1年生は約320人)
10年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、千葉大、東京大、横浜国立大、信州大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに186人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、中央大、法政大、明治大、立教大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ495人が合格。
住所	〒380-8515 長野県長野市上松1-16-12
電話	026-234-1215
Web Site	http://www.nagano-c.ed.jp/naganohs/

長野県
長野高校

2年生後半からの切り替え

基礎学力の定着と意識の切り替えで 2年生秋から受験生に

変革のステップ

背景

◎大学入試に向けた生徒の意識の切り替えが遅く、入試の時期に学力のピークを合わせることが難しかった

実践

◎模試や考査の徹底的な振り返りで基礎学力を定着させ、学部研究や学年通信、面談を効果的に使い受験意識を醸成

成果

◎多くの生徒が2年生後半から受験に向けた意識の切り替えが出来るように。より高い志望を目指す生徒も増加

「中だるみ」を前提として
下位層をつくらない指導をする

長野県長野高校は、旧制中学校の流れをくむ県下有数の進学校で、例年、国公立大に180〜200人、東京大にも10人前後が合格する。部活動も盛んで、全国大会常連の吹奏楽班（同校では部活動を班活動と呼ぶ）をはじめ、野球班や合唱班などの部が全国大会への出場経験を持つ。

多くの生徒が、部活動はもちろん、3年生7月の文化祭まで学校行事に全力投球する。こうした生徒の気質は、良き伝統として学校に活力をもたらしている反面、受験へ向けた学習のスタートを遅くさせている。進路指導主事の松原雄一先生は、それが悩みの種だったと話す。

「班活動や文化祭を一生懸命に取り組む経験が、受験にプラスになることは確かです。しかし、3年生の9月になってから本格的に受験勉強を始めていたのでは、入試本番に学力のピークを合わせることが難しくなります。2年生後半には受験生としてスタートを切れるよう、生徒の意識を早めに切り替えさせる必要を感じていました」

ただし、2年生後半に受験への意識の切り替えが出来たとしても、その時期までに十分な基礎学力が付いていなければ、志望校合格は難しい。同校の取り組みの特徴は、2年生後半だけ

に着目するのではなく、1年生後半から2年生秋までの中だるみ時期に着目し、成績下位層をつくらぬ指導を徹底した点にある。

「例年、1年生後半から約1年間にわたり、生徒の学習意欲が下がる中だるみの時期が本校で課題となっていました。中だるみを解消できればよいのですが、現実的には難しい。ならば中だるみを前提に、その影響を最小限に抑えようというのが我々の発想です。一時的に学習時間が減っても、基礎学力や学ぼう



長野県長野高校
松原雄一 Matsubara Yuichi
教職歴25年。同校に赴任して6年目。進路指導主事。「当たり前のことを高いレベルでやってみよう」



長野県長野高校
倉島敏明 Kurashima Toshiaki
教職歴29年。同校に赴任して6年目。進路指導部。「随処に主となれば、立処皆真なり」



長野県長野高校
永井俊彦 Nagai Toshiko
教職歴27年。同校に赴任して6年目。教務部。「Where there's a will, there's a way.」



長野県長野高校
佐藤健二 Sato Kenji
教職歴26年。同校に赴任して6年目。同窓会「人間万事塞翁が馬」

とする意欲があれば、生徒は必ず学習に戻ってきます。1、2年生で成績を低下させない指導を徹底することによって、2年生後半に生徒の意識をスムーズに受験へと切り替えられるのではないかと考えました」（松原先生）

学年通信や個人票を使い 模試や定期考査を徹底的に振り返る

成績下位層をつくらぬため、同校が重視したのが模試や定期考査の振り返りである。

模試は振り返りの機会を2回設けている。1回目は、模試受験後に行う自己採点だ。生徒に自己採点をさせる一方、全教科の教師で問題を分析し、解法、今後に向けた学習方法を学年通信に掲載する（P.18図）。更に、希望者を集めて各教科1時間の解説講座を開き、難問を中心に解法の解説、学習の仕方などを指導する。

2回目は、模試結果の返却後だ。個人成績票と答案が返却された時を見計らい、小問ごとの全国平均正答率を示した資料を学年通信に掲載。基礎の定着の重要性を認識させ、確実に得点できるようにさせるのが狙いである。どの問題に正解すれば志望校の合格ラインに届くのかを素点で確認させ、基礎問題での取りこぼしを重点的に復習させる。

また、すべての模試において、前回の模試よりも5ポイント以上偏差値が上がった生徒、下

がった生徒の情報を学年団で共有する。

「成績が上がった生徒に対しては、更に高い目標を目指して頑張れるように励まします。一方、下がった生徒には、教科担当者がその原因を分析し、効果的な学習方法をアドバイスしています。生徒の成績の変化は、学年全体で把握し、対応に当たることが重要だと考えています」（松原先生）

定期考査では、全教科の得点や度数分布、順位の変動を示した個人票を配付する。特徴は、得点や順位の変動に一喜一憂して終わることのないよう、個人票に反省や感想を書く欄を設けていることだ。勝因・敗因を事細かに書き込む生徒もいるが、「駄目だった」の一言で終わらせてしまう生徒もいる。後者の生徒に対しては、面談などを通して、何が問題なのか、今後どうしていきたいのかを問い掛け、具体的な改善策を考えさせている。

また、生徒の反省文の中から、他の生徒の共感を呼びそうなものを、学年通信に掲載している。選ばれるのは前向きなコメントばかりではない。「勉強しているのに出来ない。これが実力なのか」といった煩悶や苦悩が赤裸々に書かれた文章も載せている。

「前向きな文章ばかりを載せても、教師の意図を見透かされるだけです。皆、同じ苦しみを持って頑張っているということを分かっ

「学部学科研究会」で 学びへの意欲を高める

基礎学力の定着を図る一方で、意識の切り替えも並行して行う。2年生の6月と9月に行う「学部学科研究会」では、地元信州大を中心に全国の難関大から大学教員を招き、最先端分野に関する講義を、質疑応答を伴う分科会形式で実施する。生徒は希望分野に応じて受講する。これは、志望校選択に向けて学部学科の理解を深めると共に、学習意欲が下がりやすい夏休み前後に受験への意識を高めるのが狙いだ。進路指導部の倉島敏明先生は、研究会を次のように評価する。

「一方向的な講義形式ではないため、大学教員との距離が近く、活発な質疑応答が行われました。中には、『研究生生活は経済的に苦しくありませんか』といった現実的な質問をする生徒もいました。具体的な大学像を描く上で大きな刺激になったようです」

永井先生は研究会実施後、数学に対する生徒の取り組み方が変わったと指摘する。

「数学は、学んでいることが将来どのように役立つのか分かりづらい教科です。最新の研究を通して、ベクトルや微積分が社会でどのように生きるのかを知ることによって、より前向きに授業に取り組めるようになったようです」

同校では、こうした体験がより高い志望を目指すきっかけになることを期待する。

「生徒は高校入学時点であり大学を知りません。そのため、1年生の段階では、3分の1の生徒が信州大を志望校に挙げるのが現状です。地元の大学しか知らない生徒が、他の地域や難関大にも目を向けるようになってほしいと思います」（松原先生）

模試、学年通信、面談で畳みかけ 意識を切り替えさせる

生徒の意識の切り替えを図るに当たり、特に重視する時期は2年生の10月に行う研修旅行明けである。この時期は、模試が初めて5教科で行われることもあり、大学入試に向けた意識を醸成する絶好のチャンスだからだ。

生徒の意識付けを図るため、同校が活用しているのが、前述の学年通信だ。模試直前には5教科模試を受ける意味や心構えを説き、終了後には生徒の志望や成績を集計し、各大学の志望者の人数や判定まですべて公表する。他の生徒がどのような大学を目指しているのかを見せることで、志望校選択へ向けた意識を高めるのが狙いだ。更に、学年全体の学習時間の推移をグラフで示し、「この学習時間で志望を実現できるのか」ということを厳しく問い掛ける。

模試受験後の11月中旬には面談週間も設けて

いる。担任が一人ひとりの志望を確認し、受験に向けた覚悟を持つよう促すのである。

このように、模試や学年通信などの集団指導と、面談による個別指導を連動させることで、多くの生徒が2年生後期の後半を「3年生0学期」としてスタートが切れるようになるという。

「班活動や行事は、3年生の最後までやり遂げさせるのが本校の伝統です。3年生の5月になればインターハイ予選が始まり、7月には最後の文化祭があります。3年生の夏までの間で勉強に打ち込めるのは、2年生後期の後半だけだと伝えていきます。受験生としての自覚も芽生え、研修旅行前とは打って変わって、授業への集中力も高まっていくのを感じます」（倉島先生）

今後は、1年生の早い段階に学年縦断で行う進路行事を増やしていく予定だ。既に、1、2年生合同の東京大学セミナー、1〜3年共通の医学科研究会や大学別研究会などを行った。上級生の姿を見せることで、下級生にも意識付けを図っていく考えだ。

「本校の取り組みは、どれも珍しいものではありません。本校が大切にしているのは、生徒とコミュニケーションを取りながら、活動を一つひとつ丁寧に行うことです。生徒が意識の切り替えのきっかけを見つけられるような指導の在り方を、これからも模索していきたいと思っています」（松原先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2009年9月号指導変革の軌跡「東京都・私立錦城高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)